

長野市の埋蔵文化財第61集

栗田城跡(2)

(東番場遺跡)

上條器械店新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1994・3

長野市教育委員会

例 言

- 1 本書は、上條器械店新築工事（新幹線建設事業に伴う代替地）に先立ち、平成5年度事業として実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査事業は、株式会社上條器械店取締役社長上條雅敏と、長野市長塚田佐との埋蔵文化財発掘調査委託契約に基づき、長野市教育委員会埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 遺跡名称は栗田城跡（東番場遺跡）、発掘調査地籍は長野市栗田字東番場509他に所在する。
- 4 整理作業から本書作成に至るまで、財団法人長野県埋蔵文化財センター原明芳氏・市川隆之氏・河西克造氏の参加を得、検討成果に関する玉稿を賜った（III-3・4）。その他執筆は青木が担当した。
- 5 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター担当）で保管している。

目次

例言

I 調査経過	
1 調査の経過	1
2 調査体制	2
II 栗田城跡の環境	4
III 調査内容	
1 遺構	8
2 栗田城出土の遺物と若干の考察	17
3 栗田城の地籍図による復原	29

挿図目次

図1 発掘調査地とその周辺	3
図2 平成2年度調査 検出遺構・出土遺物	5
図3 昭和57年調製地形図（調査位置と字境）	6
図4 昭和27年修正地形図	7
図5 溝跡の土層断面図	9
図6 調査範囲全体図	12
図7 遺構測量図・東半	13・14
図8 遺構測量図・西半	15・16
図9 SD-2・3出土カワラケ法量グラフ	17
図10 出土焼物	18
図11 出土焼物	19
図12 出土石製品	19
図13 出土貨幣	20
図14 出土鉄製品	20
図15 栗田城跡周辺の地形図	29
図16 栗田城跡周辺の地籍図	31
図17 平成2年度調査遺構分布図	32
表 遺構別出土陶磁器一覧	28

I 調査経過

1 調査の経過

周知の埋蔵文化財「栗田城跡」及び「東番場遺跡」に近接する当該地点において、平成5年2月19日付で、長野県土地開発公社理事長小山峰男より、新幹線代替地に関する埋蔵文化財確認調査依頼が提出された。当埋蔵文化財センターでは、平成5年2月24日に試掘による確認調査を実施のうえ埋蔵文化財の包蔵を確認し、3月2日付でその旨を依頼者宛に報告した。

長野県土地開発公社から当該用地の取得と倉庫等新築を計画した株式会社上條器械店より、文化財保護法第57条の2第1項の規定に基づき、平成5年4月21日付で文化庁長官あてに「埋蔵文化財発掘の届出」が提出され、記録保存のための発掘調査実施が約されるところとなった。

市教育委員会では、発掘調査計画について、起因者との協議を重ね、4月30日付で「埋蔵文化財発掘調査の通知」を文化庁長官あてに提出。5月21日付で、株式会社上條器械店取締役社長上條雅敏を委託者、長野市長塚田佐を受託者として、埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、新築工事における建物範囲についての記録保存・発掘調査事業に着手した。

平成5年6月21日、重機を雇用した表土除去作業をもって現地における発掘作業の開始とし、7月20日に全ての現場作業を終了した。作業の経過については以下に記載する。

- 6月21日 バックホーを用いて調査範囲西側より順次表土除去作業を開始する。
- 22日 機器材を搬入する。バックホーによる表土除去作業を継続する。
- 23日 機器材の搬入を終え、天幕を設置する。バックホーによる表土除去作業を完了する。
- 24日 調査参加者集合し、調査範囲東側より遺構検出作業及び遺構の掘り下げに着手する。
- 25日 継続して遺構（SK-1～9）の掘り下げを実施する。
- 28日 遺構（SK-8～12、SD-1）の検出及び掘り下げを実施する。
- 30日 遺構（SD-1）掘り下げを継続する。
- 7月1日 遺構（SD-1、SK-9・10）掘り下げを継続する。
- 2日 遺構（SK-9～14）検出及び掘り下げを実施する。
- 6日 遺構（SD-2、SK-15・16）検出及び掘り下げを実施する。
- 7日 遺構（SD-2）掘り下げ継続。底面近くにおいて天目茶碗出土する。
- 8日 遺構（SD-2・3、SK-17～19）検出及び掘り下げを実施する。
- 9日 遺構（SD-3）掘り下げを終えて、掘削作業を完了する。
- 14日 機器材を梱包のうえ一部撤収作業を行なう。
- 15日 調査範囲全体の写真撮影を実施。検出遺構の測量準備及び、遺構内土層断面図を作成する。
- 16日 遺構測量作業（写真測図研究所）を実施する。
- 19日 遺構図作成及び、遺構（柱穴群）内出土遺物を採取する。
- 20日 遺構図作成を終え、記録作業を完了する。機器材撤収をもって、全ての現地作業を完了とする。

現地における発掘作業終了の後、室内における遺物整理及び、記録整理作業に順次移行し、平成6年3月をもって、調査報告書編集・印刷を終え、本書の刊行に至ったものである。

2 調査体制

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	滝澤 忠男
調査機関	埋蔵文化財センター	所長	荒井和雄
庶務係		所長補佐	山中武徳
		職員	青木厚子
調査係		所長補佐	矢口忠良
		主査	青木和明
		主事	千野 浩
		主事	飯島哲也
		専門主事	羽場卓雄
		専門主事	太田重成
		専門主事	清水 武
		専門員	中殿章子
		専門員	横山かよ子
		専門員	笠井敦子
		専門員	山田美弥子
		専門員	寺島孝典
		専門員	西澤真弓
調査員	矢口栄子	青木善子	武藤信子
参加者	岡沢 治子	徳成奈於子	池田見紀
	小泉ひろ美	西尾千枝	向山純子
	神頭 幸雄	川浦 秀子	佐藤ひで子
	成田 敦子	新津三千子	橋爪孝次
	三九二富子	美谷 島昇	
測量委託	有限会社	写真測図研究所	

遺物の整理作業及び報告書の作成においては、原明芳氏・市川隆之氏・河西克造氏（財団法人長野県埋蔵文化財センター調査研究員）の参加を得た。ご厚情に感謝申し上げます。

事業主体の株式会社上條器械店におかれては、埋蔵文化財保護に対する深いご理解のもと、絶大なご協力を賜った。深甚なる謝意を表するものである。また、事業請負業者である株式会社守谷商会及び、新幹線用地代替地にかかわる長野県土地開発公社関係者各位には、調査に至るまでの便宜をはかっていただいた。厚くお礼申し上げます。





図1 発掘調査地とその周辺 (1:20,000)

II 栗田城跡の環境

栗田城跡 平成2年度調査の概要(図2)

長野市大字栗田字東番場所所在の栗田城跡に関しては、内郭部と推定される一部の範囲について「グランドハイッ東公園」建設にともない発掘調査が実施され、調査報告書が刊行されている(『栗田城跡』1991 長野市教育委員会)。発掘調査は平成2年5月7日から6月11日にかけて実施され、約800㎡の調査範囲(字東番場472-1番地)からは、80基に及ぶ土壇と無数の柱穴群、それらに伴う400点以上の中世遺物が検出された。同調査の成果として、出土遺物の中心的な所属年代を14世紀代～15世紀前半代とする所見が提出され、文献史料における栗田氏関係の記述との整合関係についての注意も促されている。なお、同調査は、市内ではじめての本格的な中世城跡発掘調査となったことも特筆されよう。

栗田城跡の範囲(図4)

栗田城は、堀/内城とも呼ばれる戦国期の平城で、栗田氏の居城と伝えられている。その構造については「二重の堀を巡らす複郭式の城で、外郭は東西709m・南北1,090m、内郭はほぼ218mの方形」(『角川日本地名大辞典 20 長野県』1990)と推定されているものの、現在は、本丸跡の一部が水内惣社日吉神社の境内として面影を残すほかは、ほとんどが宅地として造成されるため、現況において城郭範囲を確認することが困難な状態あり、引用した推定範囲の実際については不明確な点が多い。

大正15年測図・昭和27年修正の『長野市3,000分の1地形図』を参照すれば、現在の日吉神社境内に残る土塁から南へ100mほど隔てて、幅15～20m、高さ1.5m程度の土塁が長さ110mにわたり遺存していた状態が確認される。これら土塁が内郭を区画するものであろうことは容易に推察され、その位置関係から土塁も含めての内郭範囲は120m四方前後の方形区画と判断することができる。また、土塁の周囲には、埋め立てを免れた幅15mの堀の一部が残され、堀跡と考えられる凹地・低地がそれに連続する形で確認できる。内郭を全周する形で、堀が巡らされていたものであろうか。

この内郭・堀の周辺では、東から南にかけて一辺250m程度の隅丸方形の地割が内郭を取り巻く形で存在することが観察される。その外側東南方向一帯は、扇状地上に部分的に入り組んだ低地域となるため、隅丸方形の地割は周囲よりやや高まりをもつ微高地ととらえられることとなる。内郭周辺の北側と西側はすでに宅地として部分的に造成が進んでおり、城郭範囲を地形図から読み取るとはすでに困難な状態といえるが、内郭を取り巻く隅丸方形の微高地を含めての300m四方の範囲を外郭の候補地としてあげることができよう。

ここでは、旧地形図を通しての観察結果から、今回の発掘調査範囲が栗田城の外郭範囲に含まれる可能性があることを指摘しておきたい。

東番場遺跡 昭和62年度調査の概要

栗田城跡の所在する東番場地籍においては、栗田城跡とは直接関係を有さない埋蔵文化財の包蔵も確認されている。栗田城跡の内郭土塁が遺存する日吉神社から西へ約100m離れた地点(字東番場532番地)においては、昭和62年度に宅地造成事業に先立つ発掘調査が実施され、古墳時代前期から奈良時代に至るまでの住居跡4軒・土壇18基が検出されている(『東番場遺跡』1988 長野市教育委員会)。当該地籍が、中世の城郭構築段階以前から継続的に居住域として利用されてきたことを示す資料といえる。また、比較的早い時期に市街化が進行した栗田地区の立地する裾花川扇状地においては、埋蔵文化財包蔵範囲の確認作業が後れをとっていたが、同調査の実施を経て、扇状地内の微地形のあり方と遺跡立地との関係にも注意がはらわれるに至っている。

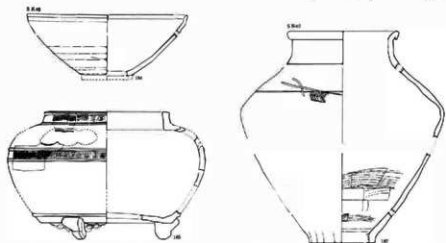
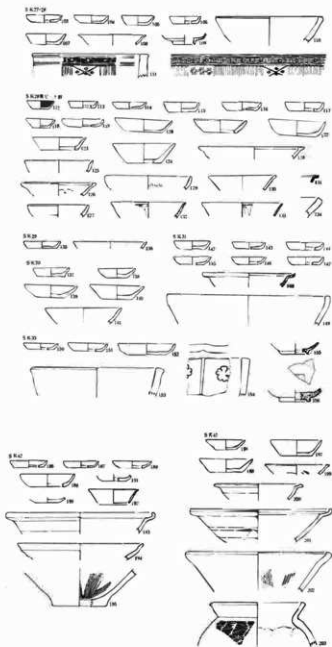
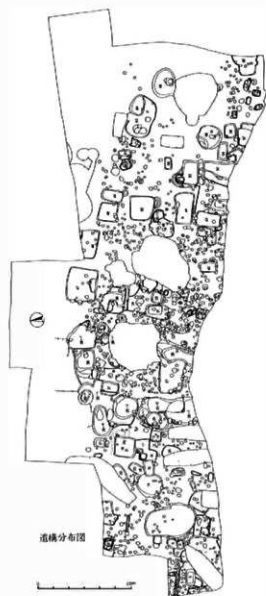


図2 平成2年度調査検出道構 (1:400)、出土遺物 (1:8)

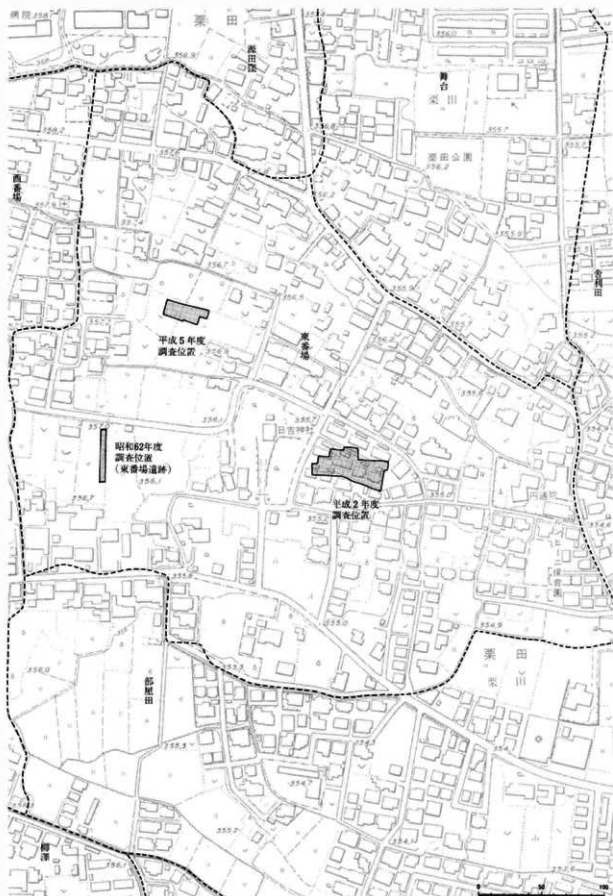


図3 昭和57年調製地形図 (調査位置と字境 1:3,000)

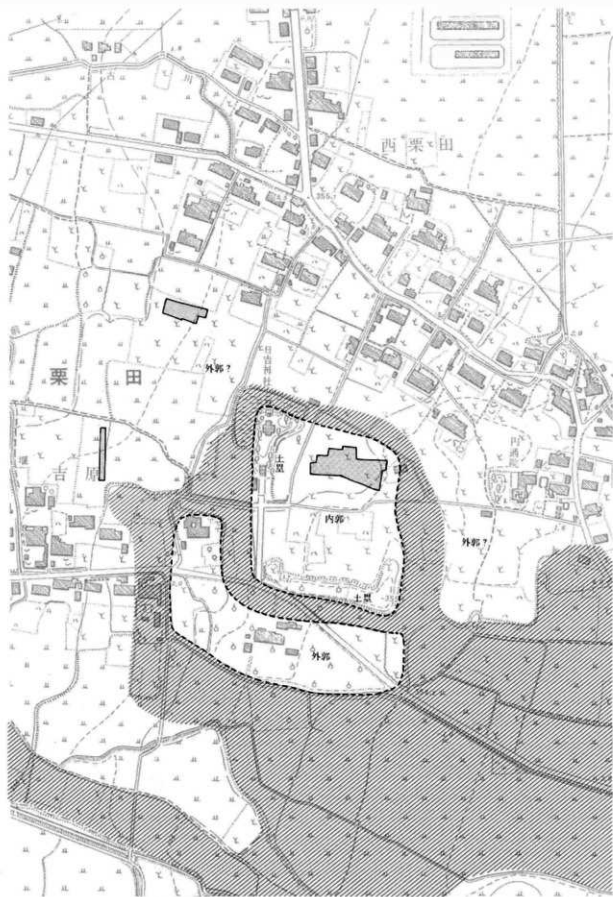


図4 昭和27年修正地形図 (スクリーン部は低地範囲 1 : 3,000)

III 調査内容

1 遺構

発掘調査の対象とした店舗建設部分約500㎡の範囲から、溝(SD)3本、と多数の土壇(SK)・柱穴が検出された。それぞれの遺構は密集した状態にあり、重複関係を確認するものも多いが、全てについて新旧の関係を把握できてはいない。

(1) 溝

1号溝(SD-1)

検出面においての計測で、幅1.8～1.4mの規模を測り、深さ50～40cmの浅い掘り込みによる。底面には幅80cm程度の平坦面が形成され、断面形態は台形に近い。覆土はほぼ均質であり、灰褐色のシルト質粘土により埋没している。上層から底面に至るまでの土層堆積には、流水の痕跡は観察されず、底面における標高分布もほぼ水平に近い。出土遺物は、約100点の土器破片・刀子1点などが覆土中層を中心に比較的密な状態で検出されている。



調査区の全景(西より)



同上(東より)



調査範囲東側(南より)

2号溝 (SD-2)

検出面においての計測で、幅1.9～1.5mの規模を測り、深さ90cm前後の深い掘り込みによる。土層断面の検討によれば、表土下の水田耕作土層(図5-1～3)下面からの掘り込みは1.5mを越え、本来の深さはさらにそれを上回るものと判断される。底面の平坦面は幅30cm程度と狭く、断面形態はV字形に近い。城館遺構を構成する堀と判断して大過無いものとする。覆土上部は、黒灰色粘土・シルト層(4・6・7)と灰褐色粘土・シルト層(5・8)が、交互にブロック状に堆積した状態が観察され、人為的な埋め立てによる埋没の可能性が強く示唆される。覆土下部(9・10)には壁面の崩落に伴うと推定される砂粒あるいは粘土小塊の混合が多く認められ、底面には滞水に由来する薄い膜状の粘土質堆積物も観察される。なお、底面の標高分布はほぼ水平に近く流水に関する機能は薄いものといえる。

遺物の出土は土器破片類を中心として約200点を数え、上・中層に集中する傾向がある。遺構規模に比較すればまばらな分布とを感じるが、完全に近い天目茶碗・土器皿の単独出土が目立つ。銭2点の出土も特筆される。

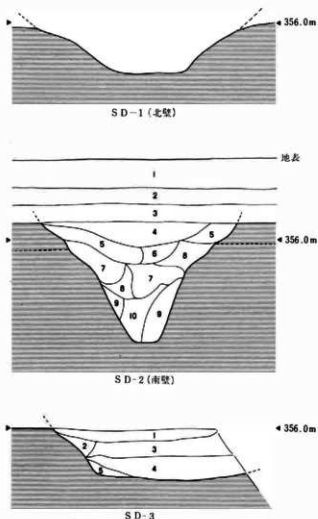


図5 溝跡の土層断面図(1:40)



調査範囲西側(南より)

3号溝 (SD-3)

調査区西端に位置し、さらに西側一帯が擾乱を受けているため全形を把握できない。北及び南側は調査範囲内で掘り込みが収束する可能性が認められ、溝というよりも大型の土壕と位置付けたほうが正解であろう。

規模は南北に10m、検出面からの掘り込み深さは60～30cm、底面は南側ほど深く、北側へと傾斜し、凹凸の少ない平坦面が形成されている。覆土は、上層一褐色シルト(1・2)、中層一多量の炭化物・灰の混合(3)、下層一炭化物を少量混合した灰色シルト質粘土(4・5)により構成される。遺物は中層において集中的に包含される状態にあり、土器破片を中心として約300点を数える。遺構内での出土量としては最多であり、完形に近い土器皿の出土も目立つ。銭3点も検出されている。

土壕 (SK)

柱穴群とは区別されるべき大形の穴(幅員50cm以上)と、方形あるいは円形の竪穴的な掘り込みを土壕とした。遺物の出土を確認した遺構のみに番号を付し、19号までを数える。

- (SK-1) 深さ15cm、長辺70cmの隅丸長方形。
- (SK-2) 深さ10cm、長辺1.7mの隅丸長方形。
- (SK-3) 深さ15cm、長径70cmの楕円形。
- (SK-4) 深さ15cm、長辺70cmの長方形。
- (SK-5) 深さ10cm、一辺2m以上。長方形?
- (SK-6) 深さ20cm内外、長辺2.5m、隅丸方形2基が接続?。底面に厚さ5cmの炭化物・灰混合層が堆積。遺物・礫を多く包含。
- (SK-7) 深さ20cm内外、一辺1.7mの方形?。底面は平坦で堅硬。覆土に大小の礫を多数包含。
- (SK-8) 深さ15cm内外、長辺2.5m以上の長方形?。底面は凹凸で軟弱。
- (SK-9) 深さ50cm、上面は径80cmの円形、底面は長辺65cmの長方形。底面近くに大礫の集積。
- (SK-10) 深さ50cm、一辺75cmの隅丸方形。鉄釘6点出土。墓壕?



2号溝 (南より)



3号溝 (南より)



手前3号溝 (北より)

(SK-11) 深さ15cm、長辺1mの隅丸長方形。刀子出土。

(SK-12) 深さ40cm、長辺60cmの隅丸長方形。鉄3点出土。墓塚？

(SK-13) 深さ45cm、径75cmの円形。鉄9点出土。墓塚？

(SK-14) 深さ55cm、長径50cmの楕円形。礎石出土。

(SK-15) 深さ15cm、長辺50cmの長方形。覆土に大小の礫を多数包含。

(SK-16) 深さ15cm、楕円形。

(SK-17) 深さ30cm、楕円形。

(SK-18) 深さ25cm、隅丸長方形

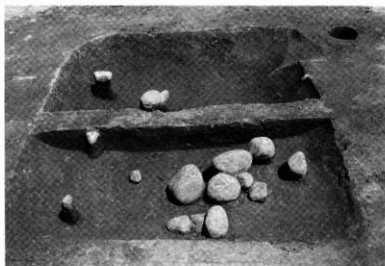
(SK-19) 深さ40cm、隅丸長方形

柱穴群

調査範囲全域にわたって分布する柱穴は、総数約350を数える。特に中央付近では互いに近接して密集する傾向が観察される。重複が著しく、配列関係を把握するには至っていないが、掘立柱建物等の痕跡を示すものか。平均的には径30cm前後の円形掘り込みであるが、やや大形で礎石を底面に据えるもの、方形のものも確認できる。



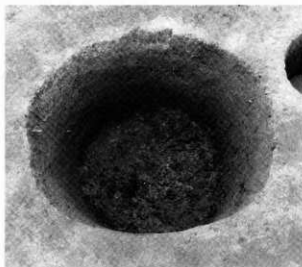
6号土壇 (SK-6)



15号土壇 (SK-15)



9号土壇 (SK-9)



13号土壇 (SK-13)

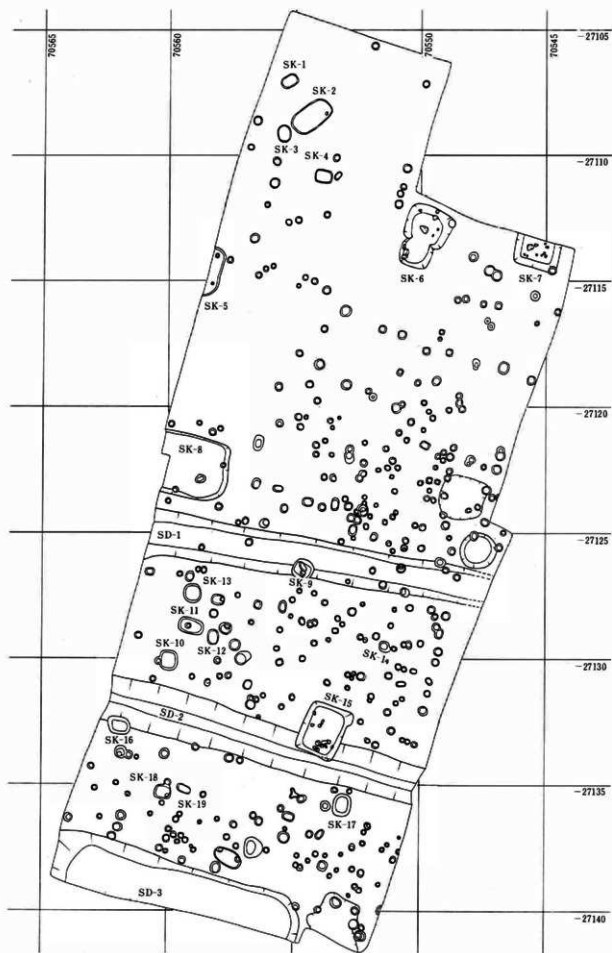


図6 調査範囲全体図 (1 : 150)

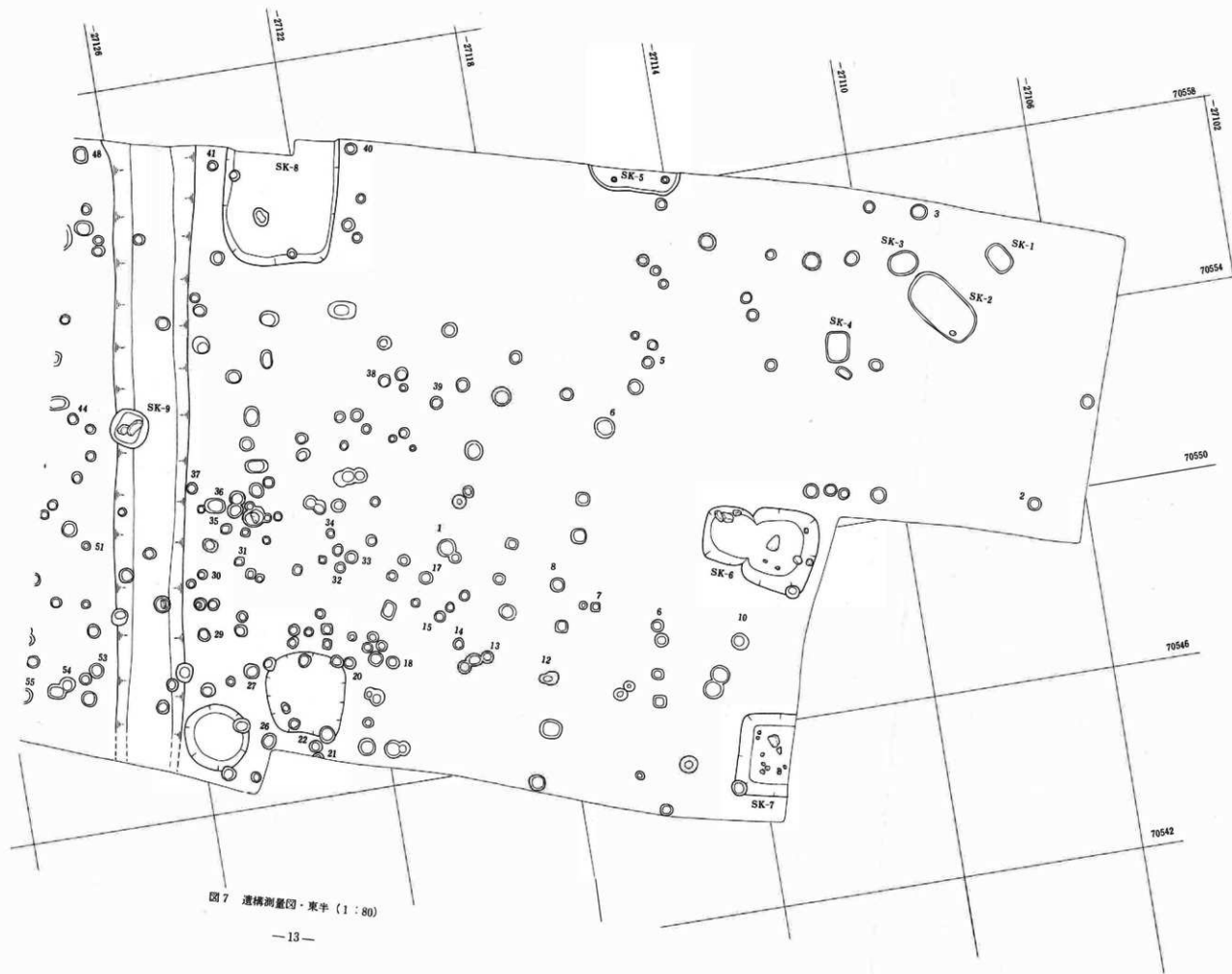


图7 遺構測量図・東中 (1:80)



图8 遺構測量図·西半 (1:80)

2 栗田城出土の遺物と若干の考察

(財)長野県埋蔵文化財センター調査研究員 市川隆之

遺物の出土状況を材質別に概観し、全体の傾向や遺跡内の位置・派生する問題について述べる。

(1) 遺構別出土状況

① 焼物 (図10・11)

全体の傾向としてカワラケは小片ながら大概の遺構で出土が認められたが、陶磁器類の出土は少ない。ここでは図示した遺物を中心に説明を加え、遺構別の焼物出土状況は表にまとめる。

SK-1・3・7 図示したものはいずれもカワラケ小片である。

SK-6 カワラケは図示したものの(1・2)を含め破片で出土している。他には木灰屎味の薄い灰釉をかけた古瀬戸瓶子(3)と焼成が悪く内耳に近い須恵質すり鉢(4)が出土している。

SK-9 カワラケは図示した(1~4)を含めて小片ながら比較的多く出土している。

SK-10 カワラケ小片と須恵質の鉢(1)が出土している。

SD-1 カワラケ小片と古瀬戸の平碗(1)、在地産と思われる須恵質のすり鉢(2・3)が得られている。

SD-2 龍泉窯系青磁碗(1・2)、口禿の白磁皿(3)、古瀬戸天目茶碗(4・5)、珠洲の甕(6)と比較的多くのカワラケが出土した。カワラケは口縁から底部まで遺存するものが13点あり、分量は大(7~14)と小(16~18)2種認められ、その比はほぼ大3に対し小1である。また、特大分量が1点(15)と柱状高台を持つ小型(19)が1点認められる。すべてロクロナデ質を顕著に残し、外底は回転糸切り痕を残す。胎土は砂粒を多く含み、やや軟質の焼成である。なお、口縁部破片26片の中で油煙痕が認められるのは3点ある。

SD-3 SD-2と同様に比較的多くの遺物がある。陶器は古瀬戸天目(1)・折縁皿(2)・瓶類(3)、在地産と思われる須恵質のすり鉢(4)がある。カワラケは形態・胎土・焼成ともSD-2出土品と類似する。口縁から底部まで遺存する破片は41点を数え、分量は大(5~22)と小(28~37)の2種でほぼ4対3の比率である。口縁部破片95片のなかで油煙痕を残すものは15片ある。

柱穴出土遺物 (Pit-5・19・20・28・36・48) カワラケの小片が得られている。

検出面出土遺物 陶器は古瀬戸平碗(1~3)、珠洲壺(4)、在地産と思われる須恵質のすり鉢(6)があり、カワラケは小片で得られたなかで1点のみ(5)図示した。

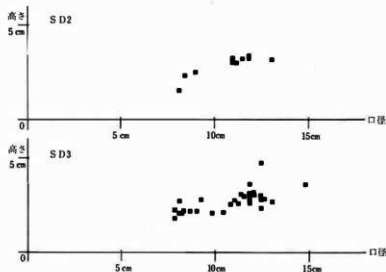


図9 SD-2・3出土カワラケ分量グラフ

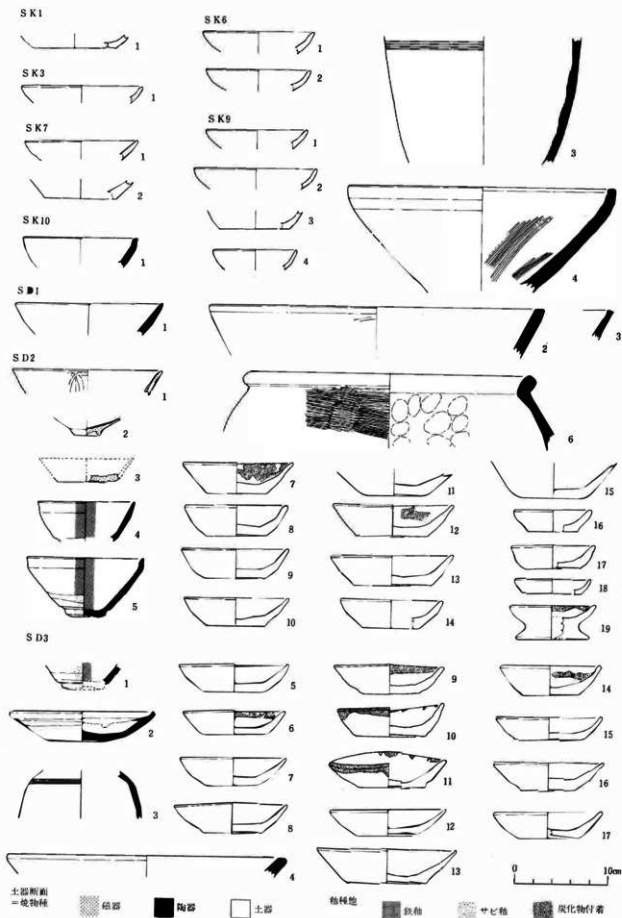


图10 出土烧物 (1:4)

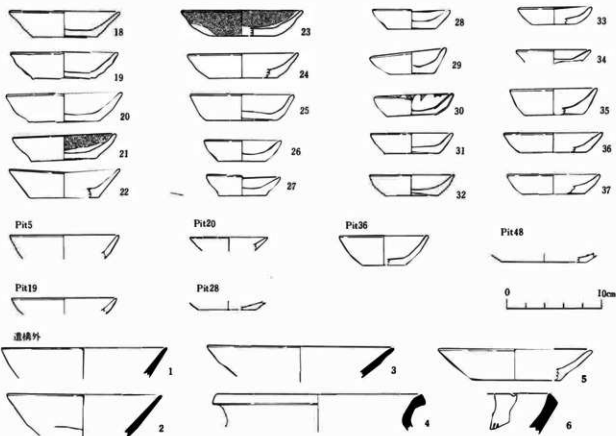


図11 出土焼物 (1:4)

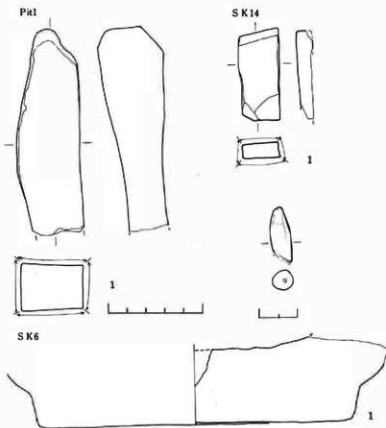


図12 出土石製品 (1:2)

② 石・金属・土製品 (図12~14)

石製品では砥石が2点と石鉢が1点出土している。砥石は頁岩製で石鉢は溶結凝灰岩製である。また、土製品では土鉢が1点出土している。

金属製品は銅銭と鉄製品がある。銅銭は全部で16枚出土したが、SK-13の9枚とSK-12の3枚は本来密着した状態であったようである。SK-12出土のものは図示のみ以外に密着して剥せないものが1枚ある。また、SD-3出土の銅銭は全体的に遺存状況が悪く、残存部分のみ図示した。これらの銅銭の初鋳年は伴出焼物年代より遡る例が多いが、SK-13出土の永楽銭のみは伴出焼物年代と近似した年代を示す。

鉄製品では刀子と釘が最も多く、他

S D3



「皇祐通宝」

S K13



「祥符元宝」



「元豐通宝」



「天聖元宝」?



「祥符元宝」



「元豐通宝」



「熙寧元宝」



「皇祐通宝」



「熙寧元宝」

S K12



「治平元宝」



「皇祐通宝」



「永樂通宝」



平明



「景德元宝」?



図13 出土貨銭

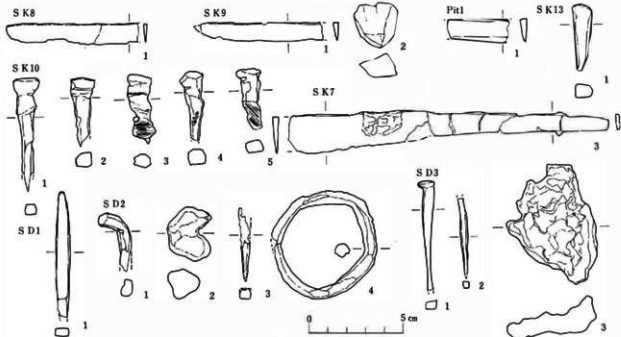


図14 出土鉄製品

の製品や鉄さいは少量である。S D-1からは両端の細くなる棒状製品、S D-2からは釘・環状製品・鉄滓が出土している。環状の製品は鍛造品で5箇所が折り曲げられている。遺存状況は悪く海綿状になっている。S D-3も釘と鉄滓が出土している。S K-8・9・13、Pit-1からは刀子が出土し、S K-9では周囲を打ち欠いた鉄滓も併せて出土している。S K-10から比較的まとまって釘が出土したが、木質部を遺存させるものもあり、木棺に使われたものと思われる。また、Pit-50からも釘が出土している。

(2) 出土遺物の傾向

① 出土遺物の年代

長野市周辺の在地産土器群の編年研究は緒についたばかりなので、編年の整備されている珠洲・古瀬戸・輸入磁器の年代からみると、13世紀後半から14世紀前半のA期と（14世紀末から）15世紀前半のB期の2時期にまとまりがあることが知られた。A期に該当する可能性のある遺構はSK-10以外は判然とせず、A期の遺物の多くはB期遺物と混在している。従って、今回調査された遺構のほとんどはB期に所属すると思われる、なかでもSD-1～3は15世紀前半のほぼ同じ時期に廃絶している可能性がある。さらに溝跡を切る遺構の存在から、B期以降には2段階の遺構変遷が認められることになる。この溝を切る遺構の年代については定点となる遺物が出土していないので細かな年代は明かにしえなかったが、総体的に15世紀後半以降の遺物は認められなかったので、B期にあまり時間を置かない所産の可能性もある。

② 器種と焼物構成の特徴

各時期の器種・生産地別組成の比較にあたり、同時期の遺物を抽出する方法としては個別焼物の年代比定から抽出する方法をとった。それはA期遺物の多くがB期の遺物と混在していることと、14世紀後半の遺物が少ないことからやはりA-B期は分離されると考え、出土一括品での比較する方法では問題があると思われることによる。ただし、この方法では年代の比定できていない在地産土器群の扱いに問題が残るが、伴出遺物の年代と形態的比較によって概略の年代を推測して補うことにした。もちろん、出土全体量が少ないので今回採取された遺物にも若干不安も残る。

A期

食膳具 碗は中国産の青磁碗が2点あり、皿は白磁1点である。カワラケは形態的に異質なSD-2の18が該期に該当する可能性がある。

貯蔵具 古瀬戸と青白磁の瓶子、珠洲の甕がある。

調理具 少量ながら珠洲製品と思われるすり鉢がある。又、在地産と考えられるすり鉢がこの段階で出現している可能性もあるが、型式的な検討ができていないため確実なところは不明である。

以上より、食膳具は碗・皿、調理具はすり鉢、貯蔵具は壺・甕・瓶子が認められ、煮炊具は認められない。この器種構成は県下に認められる一般的な状況と同じである。ただし、全体の出土量が少ないなかでの瓶子2個体は比率が高いといえる。次に各器種を生産地別に見ると調理具・貯蔵具が珠洲製品、食器は輸入磁器と在地産、貯蔵具の瓶子のみが古瀬戸と青白磁で構成されている。ここでは年代的な問題を残す在地産すり鉢と、宴会など特殊な場面での使用も推定されるカワラケを除くと基本的に広域流通品でまかなわれていることが指摘できる。しかしながら今回の調査域では常滑や中津川など東海産の雑器が認められない点については評価できなかった。なお、瓶子に青白磁の梅瓶が含まれる点が注目される。

B期

食膳具 碗は古瀬戸の平碗と天目がある。輸入陶磁器は含まれていない。また、出土したカワラケのほとんどがこの段階に所属する可能性がある。

貯蔵具 珠洲甕では直接年代比定できるものはなかったが、胴部破片もあるので全く該期に比定できる製品がないとは言いきれない。

調理具 須恵質のすり鉢と焼の悪い内耳鉢に類似したやきものすり鉢がある。焼成はやや異なるが、両者の成形方法は類似しており、これらのすり鉢は鍋柄氏が指摘した在地産のすり鉢に該当すると思われる。また、焼物ではないが石裂の鉢が1点出土している。

煮炊具 内耳鍋の胴部破片が少量採取されている。口縁部の破片がないので時間的な位置付けに問題を残すが、量の少なさはやはり出現期にあたるからだろうか。

B期の器種は基本的にA期と大差ないが、新たに煮炊具が加わる。生産地別の構成では食膳具は輸入磁器に換わって古瀬戸が主体を占める。貯蔵具は前代からの延長にあると思われるが、珠洲では壺等の生産減少が指摘される段階であるので問題を残す。また、調理具については珠洲よりも在地産の須恵質のすり鉢と石製のすり鉢が多く、煮炊具は在地産の土器で占められている。器種構成では煮炊具の出現が特徴的であるが、これは東日本の広範囲で認められる現象と指摘されている通りである。また、生産地の構成ではA期とは大きく異なり、すり鉢・鍋を中心として在地生産品が増加することが特徴的である。この在地産土器群は煮炊具の一部を独占的に担うが、すり鉢などは広域流通品の補完として出現している可能性も考えられる。また、大量のカワラケの存在は遺跡の特徴を端的に表現しているようである。

(2) 調査地点の遺跡内の位置

① 館主郭部分との出土遺物の年代的比較

1990年に長野市教育委員会によって主郭とされる部分が調査され、ここからも大量の焼物が検出された。これらの遺物年代はほぼ13世紀から15世紀までの年代幅のなかで捉えられるものであり、大窯製品や内耳鍋の新しい形態は含まれていない。もちろん、この遺物年代は館の存続時期を直接示すものではなく、現地表面に痕跡をのこす館の最終的形態は15世紀代に形成されたとしても、それ以前が館であったかを示してはいない。しかし、基本的に今回の調査で得られた遺物の年代は主郭部分出土の遺物年代幅のなかで収まるものであり、本調査部も主郭部分と類似した動きのなかで理解される可能性がある。今回の調査結果からは、13世紀後半～14世紀前半と15世紀前半頃にまとまりがあるが、遺構は13世紀後半～14世紀前半が不明瞭で、15世紀前半とそれ以後の最低2時期の変遷が捉えられている。この結果から少なくとも土壘を備えた館の形態が確認される15世紀前半段階に今回の遺構群が共存していた可能性が高いが、少なくとも14世紀後半代の空白期において出現している可能性がある点と15世紀代では2段階の変遷が捉えられる点に注意される。おそらく、一般的に言われる館形態の出現と館を含む地域社会構造の変化を表現していると思われるが、その具体的な様相はわからない。

② 焼物組成・器種構成の比較

前回調査に比べれば今回得られた遺物量は非常に少なく、量の少ない器種の検出確率を考えれば存否のみの比較は問題を残すが、ここでは概略の傾向として比較する。A期の主郭部では輸入磁器の碗・皿、山茶碗、カワラケ、珠洲・常滑・中津川の壺、古瀬戸と青白磁の瓶子、珠洲・常滑?の壺、珠洲と東海窯のすり鉢が僅かに認められ、原氏によって貯蔵具は北陸と東海産がほぼ等量認められながらも調理具は圧倒的に北陸産が卓越することが指摘されている。器種の比較では手づくねカワラケと卸皿が今回認められず、生産地別比較では東海産の貯蔵具が今回ではほとんど認められていない違いがある。長野県の中世前半において階層的な差異が焼物組成の上にもどのように反映されるか検討できていないが、仮に食器や瓶子などの特定貯蔵具にそれが認められるとすると量的な差異と少量の手づくねカワラケの存否以外にあまり差異は顕著でない。また、東海製品の搬入状況の違いのもつ意味も比較材料が少なく何ともいえない状況であり、今後の課題として残される。

B期段階の器種的な比較では今回、火鉢、大型の精製カワラケ、輸入陶磁器や古瀬戸の大型鉢類、卸皿、香炉が認められていない。この欠落する器種以外は食器に輸入陶磁器が認められない点が挙げられ、貯蔵・調理の雑器については類似傾向にある。この比較の上でカワラケが多量に出土している点は共通する遺跡の特性として認められる。比較の上で欠落する器種として輸入陶磁器の鉢や瓦質火鉢といった稀少器種の存否や、古瀬戸と複合

する食器において輸入陶磁器の占める率が高いことは基本的に主郭部の優位性を示している可能性が考えられる。但し、主郭部分で出土する焼物がすべて高級品ばかりであるのではなく、最上のもから下位に位置するものまで幅を持っており、例えば、主郭部分で出土した香炉には輸入磁器もあれば、土器の香炉も含まれる。つまり、総合的に主郭部分には階層的に上位の位置が与えられるが、内部の居住者には階層幅がある可能性もある。

(4) 組成の地域的な様相について

① 在地産土器群の特徴と調査成果の意義について

かつて、信濃の在地産土器としてはカワラケと内耳鍋が知られており、この2者は器種もさることながら胎土が若干異なるので後者を「内耳土器」と呼称する例もみられた。現段階ではこの2種の焼物の生産体制を含めた系譜については明かにしないが、後述するように近県である北関東などは別の系譜の焼物と理解されているようである。このような中世の在地産土器については近年、注目すべき見解がいくつか示されている。

一つは鋤柄氏によって須恵質の在地産すり鉢の存在が指摘されたことであり、もう一つは羽毛田氏によって中世後半期の石製調理具がまとめられ、そのなかですり鉢の存在が指摘されたことである。さらに、全国的な中世土器研究の進展によって在地産土器生産は中世後半に増加し、しかもそれらは広域流通品の模造品生産を含め複雑な製品が複雑に展開している状況も指摘されてきている。

今回の調査で検出されたSD-1~3は大量の出土遺物を含みながらもほぼ15世紀前半に埋められていることが判明した。従って、在地産の土器群の様相が明かでなかった本地域において一つの定点を与える良好な資料群と位置づけられるだろう。その出土品にみられる特徴は多くの在地産土器群や石鉢が認められることがあるが、須恵質のすり鉢が若干先行して存在し、内耳鍋の流通は若干遅れていることが知られた。さらに、中世後半の東北信では雑器類が珠洲をはじめとする搬入品で賄われるばかりでなく、実際には在地産の製品が占める率が高い状況が判明した。これらの在地産土器は一定の器種を分担しながらも1面では広域流通品の補完的な性格をもつ状況が考えられた。そして、この様相は先にみたように萩野氏や浅野氏が指摘する状況と類似しており、中世後半を特徴づける状況と知られる。以下に今回の調査成果から派生する在地産土器の問題について補足する。

・須恵質のすり鉢

鋤柄氏は県内出土の中世陶磁器を整理するなかで長野市四ツ屋遺跡出土の須恵質のすり鉢を在地産と指摘している。鋤柄氏の説明文の一部を引かせていただくと「体部は口縁にむかって厚さを減じながら内湾気味に立ち上がり、口縁部は断面が方形を呈する。調整は体部外面上半部と底部脇に横ナデ、下半部に履位のヘラ削りが施され、底部外面には砂が啗く付着している。」内面には却目が認められ、焼成は「灰色及び灰白色を呈し、焼成は軟質である。」と述べている。この在地産すり鉢に該当するのはSK-6、SD-1・3出土品に認められ、体部のヘラ削りは判然としなが体部外面をタテ方向に刷毛ナデ→ヨコナデし、口縁外面から内面を回転台でナデている。口縁の形状は端部が方形のものと内湾ぎみになるものがあり、焼成は還元炎焼成で堅目のものから軟質のものまで認められる。以上の特徴を有する鉢は北東中信にかけて分布するが、飯山市では出土があまり認められず、松本平でも出土量が限られていることから、善光寺平に最も濃厚な分布があるようである。また、年代的な位置では鋤柄氏が14世紀としたが、やはり、14世紀を含みながらも今回の調査例から15世紀前半まで認められることが知られた。この在地産土器の位置づけであるが、系譜については鋤柄氏は形態と焼成の類似から珠洲系の影響を受けていると指摘したが、これは間違いのないように思われる。ただし、調整技術は珠洲とは異なり、また生産器種もすり鉢に限定されるので浅野氏の指摘するように単純に珠洲からの影響を受けたとは言いきれない面がある。現段階では北関東の瓦質片口鉢の展開の類似からも在地で出現する模倣品として位置づけられる可能性があると思われる。また、北関東では瓦質片口鉢の生産工人が内耳鍋生産にかかわるとされるが、信濃において

は内耳鍋がこのすり鉢分布域以外で生産され当初より酸化炭焼成であるので、同じ工人の系譜とは言いきれないが、中世後半の在地産内耳鍋などとは別の生産体制のもとにあったとは断定しきれない。

・内耳鍋

今回の調査で得られた内耳鍋は非常に僅かであり、口縁部形態の判明する個体には皆無である。従って、形態的な問題については言及できないが、内耳鍋の出土量の少なさをより15世紀前半段階での流通量の少なさは指摘できる。前回調査においても類似した状況が知られるので調査地点の特徴ではなく、時期的な様相を考えられる。野村氏は松本平出土の内耳鍋の胎土分析から、時期を追って出土量が増加する背景に生産地の増加があることを明かにした。本遺跡の様相も時期的にも内耳鍋出現期にあたることから基本的にはこの理解のなかで捉えられると思われるが、中世後半に特徴的な在地産土器の量的な増加とそれを出現させた生産体制の変化は中世後半の様相を読み解く鍵になるとと思われる。ここでは十分に検討する用意はないが、今後の検討に際して問題になりそうな状況を指摘しておく。一つは浅野氏が指摘するように内耳鍋の出現と瓦質のすり鉢の関係である。北関東では瓦質のすり鉢を生産した工人がそのまま瓦質の内耳鍋を製作していくとされ、長野県で量的に増大する段階では瓦質から酸化炭焼成に変化するとされる。この様相との比較において問題になるのは焼物種としての内耳鍋の出現の系譜に関係して先行する在地産のすり鉢との関係と、同じく先行しているカワラケとの関係とそれらの焼物の生産変化が問題となる。今回の調査から内耳鍋とすり鉢が別の焼物として共存する可能性もあるが、SK-6のように内耳に近い焼成の製品も認められるので、関係については明かにしえなかった。いずれにしろ善光寺平全般のなかで検討されるべきと考えられる。

・カワラケ

カワラケはSD-1～3より大量に出土し、このなかでは余り形態差は認められない。従って、編年上で一つの定点を与えることのできる良好な資料とできる。カワラケの形状はやや傾斜して立ち上がる体部で端部はやや厚めに丸く納められる。内面に顕著なロクロナデ模が残され、全体の造りは比較的厚手である。胎土は全体的にち密であるが風化礫粒などが含まれ、焼成も若干軟質・還元炎ぎみに焼成されているようである。この前段階に位置するタイプについては前回調査で得られたものが位置すると推測される。このカワラケは中世を通じて認められる在地産土器であるが、中世後半期の変革期のなかでどのように位置づけるかは明かでない。先に述べたように内耳鍋とは別の生産体制で生産されていたとすれば、内耳鍋の生産体制の変化との関連が興味もたれるが、これについても今後検討する必要があると思われる。

・石鉢

長野県の中北東信では石製鉢が中世後半期に数多く認められるが、その出現と変遷についてはまだ明かにされていない部分が多い。しかし、本遺跡の調査で少なくとも15世紀前半段階では出現していることが知られ、13世紀～14世紀前半の遺跡ではほとんど出土が知られていないので、ほぼ14世紀後半から15世紀前半にかけて出現していることが推定された。この年代は須恵質のすり鉢の出現と類似している可能性もあり、両者は偶然一致した時期に出現するのではないように思われる。すなわち、東海産・珠洲産のすり鉢の流通減少と比例して出現し、地域的にも東海と北陸の中間で認められることから、すり鉢のような消耗の激しい製品の流通状況の変化に対応して出現していると推定される。このことは中世後半の地域社会を理解する上でも生産地の解明が望まれる。

② 組成にみる地域的特徴について

中世の生活容器はさまざまな産地で製作されたものが遺跡に運び込まれている。そして、遺跡で出土する焼物の生産地組成は生産地や流通状況、あるいは階層性や活動の内容などの消費者側の選択など歴史的な背景を表現しているとされる。もちろん、そこには発掘面積や発掘方法、遺存状況などに規定される条件も考えなければな

らないが、類例の増加によって地域的な組成の特徴や構造が明かになり、併せて歴史的な背景の分析も進むものと思われる。これまでの検討を通して北信での器種と組成変化についてどのような様相が描けるようになったのかを概略ながらみてみることにしたい。

岡川氏は珠洲製品の出土分布図を作成し、豊野町から上田市までの千曲川沿いで認められることから、千曲川を遡って流通したとした。この検討は珠洲製品のみに限定したものであったが、北信で中世陶器の流通について検討した初期の検討として注目される。この中世陶磁器の流通状況はさらに東海産・在地・輸入陶磁器を含めて県内の流通傾向を鍋柄氏が総体的にまとめている。氏は東北信と中南信に分離して捉え、北信について大きく3段階の変化を想定した。すなわち13世紀段階では中南信同様に壺・甕・すり鉢といった雑器類は常滑などの東海産陶器が一定量を占めているが、14世紀段階には瀬戸産の食器が入るものの、圧倒的な珠洲製品の流入と珠洲の影響をうけた在地産のすり鉢で占められる状況へ変化し、さらに15世紀で再び瀬戸産のすり鉢が流入するとした。そして特に14世紀が長野県の東北信と中南信の地域性が顕在化する段階と捉え、15世紀で瀬戸産の焼物が増加するのは近世の大窯業地形成の先駆けであろうと推定した。また、原氏は本遺跡の前回調査で出土した遺物をまとめているが、遺跡の特性としてカワラケの多出と火鉢の出土を挙げ、珠洲製品と東海産諸窯製品について貯蔵具では両者がほぼ1:1であるのに対し、すり鉢は珠洲系製品が圧倒的な量を占めることを指摘されている。

これ以外に検討の進んでいる近県の様相をみておく。北陸の焼物流通については吉岡氏がまとめているが、氏は流通の状況から大きく3段階6期の画期を設定している。この段階設定のなかの大画期は珠洲の日本海沿岸流通圏の成立と東北・北陸の地方窯の消滅に認められる地方窯の第一次競合・淘汰のおこる14世紀前半、広域市場圏確保のための飛躍的増産と特産の商品としての品質の向上の同時達成のなかで15世紀後半からおこる第2次淘汰が越前窯によって制覇される16世紀初頭としている。そして前者の画期の背景には生産と一体化した有力者の多角経営の一環のなかでの輸送から中核港湾とそこに基地をおく問丸商人の出現、後者の画期は都市問屋商人と海上権を掌握した特定廻船業者の結託に対応すると想定している。また、東日本の在地土器を中心にまとめた浅野氏は4期の段階を設定している。すなわち、1期(12世紀中頃から13世紀中頃)は食器・煮炊具の漆製品や鉄製品にかわり、在地土器にカワラケのみがあり他は広域流通品で賄われる段階であり、2期(13世紀後半～14世紀中頃)は前代からの状況に加え、壺・片口鉢の在地産瓦質土器が北関東を中心に出現するとしている。3期(14世紀後半～15世紀前半)は前代からの瓦質土器は壺が欠落し、鍋と片口鉢の生産の隆盛を特徴として挙げ、該期が西日本の瓦器製品生産確立期にあたる類似性を指摘する。4期(15世紀後半～16世紀)は在地土器の瓦質から土師質へ転換と各地のすり鉢生産開始と搬入品の増加を挙げ、萩野氏の強調した該期の1国ないし半国程度の在地窯と吉岡氏の述べた広域流通との比較をしている。両氏の検討から広域流通品の淘汰と流通圏の狭い在地土器の進展といった様相が器種別分業と広域流通品の模倣といった補完関係のもとに成立していく様相とできようか。また、日本海沿岸での生産地淘汰が進行して特定産地の製品が広域流通圏を獲得していくのと対照的に内陸部では13世紀後半から流通圏の狭い瓦質土器の生産が開始され、それは中世後半期へも連続している点は注目される。

次にこれらの検討と今回の調査を含む近年の北信の状況を比較する。本遺跡に係わる数度の調査によって得られた遺物は13世紀から15世紀代のものであり、特に14世紀後半から15世紀にかけてはかなり充実した遺物が認められている。そのなかで、目につくのは先に述べたように在地産の土器群の存在である。在地土器にはカワラケ・内耳鍋の酸化炎焼成土器と鍋柄氏の指摘した須恵器質のすり鉢がある。前者のカワラケは出土量が多いが、内耳鍋は余り顕著でない。また、すり鉢については珠洲と同量か、圧倒する量が認められるようであり、さらにここに石製のものが増加すると在地産のほうが多くなるようである。かつて鍋柄氏のまとめた流通状況のなかで13

世紀後半から14世紀前半までの壺・甕は珠洲と常滑・中津川製品、14世紀以降は珠洲製品が圧倒的な量を占め、瓶子のみに古瀬戸製品が認められる状況は追証されている。その一方で中世後半期の在地産土器については新たな知見が加えられ、中世後半期の様相について若干の変更が必要になってきているといえる。特に中世前半期の広域流通品が多い状況に比べ、後半期には鍋、鉢を中心とした在地産の土器群や石製品が発展することが知られてきたことである。また、従来は珠洲の流通圏とされていた長野市周辺でも、在地産の須恵器質すり鉢の占める率が意外と高い可能性は先にみたとおりである。この点は鍋柄氏の検討以後、浅野氏が在地産の動向を整理したなかで明かにしてきているところと共通する状況もあり、今後15世紀後半以後の様相が明らかになるところで検討しなおす必要があると思える。

参考文献

- 岡川勇夫「千曲河沿岸に於ける珠洲焼の分布」『長野』66 1976
岡川勇夫「千曲河沿岸に於ける珠洲焼の分布(その2)」『長野』94 1980
小林秀夫「長野県における内耳土器の編年と問題」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市その5』1982 長野県教育委員会
原明芳「栗田城跡-遺物」『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)』1991 長野市教育委員会
羽毛田卓也「石すり鉢」『大井城』1986 佐久市教育委員会
鍋柄俊夫「中世信濃における陶磁器の産地構成と流通」『信濃』38-4 1986
浅野晴樹「中世遺跡の土器組成における問題」『埼玉考古学論集』1991
「東国における中世在地系土器について」『国立歴史民俗博物館研究報告』31集 1991
萩野繁春「『財産目録』に顔を出さない焼物」『国立歴史民俗博物館研究報告』25集 1990
菅原正明「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』19集 1989
吉岡康暢「北東日本海域における中世陶磁の流通」『国立歴史民俗博物館研究報告』19集 1989



S 2 出土瀬戸天目



SD-2 出土カワラケ



SD-3 出土カワラケ



陶磁器と須恵系

SK	カワラケ				内 耳 鍋	陶磁器・その他
	口 底	口	底	不 明		
SK 1			1	2	3	
2				4	4	
3		1	2	2	5	
5			1	2	1	
6		4		10	14	在地播鉢? 1 (4)、古瀬戸瓶子 1 (3)
7		2	1	4	7	
8				6	6	1
9	2	16	12	17	47	
10				7	7	珠洲播鉢 1 (1)
11				1	1	
12					0	1
13				2	2	
14				1	1	
15			2	8	10	古瀬戸平碗 1
16				2	2	古瀬戸天目 1
SD 1		16	15	57	88	2 古瀬戸平碗 1 (1)、珠洲甕 2、在地播鉢 4 (2・3)
2	13	13	26	143	195	青磁碗 2 (1・2)、白磁皿 1 (3)、古瀬戸天目 2 (4・5)、在地播鉢 1、カメ 2 (6)
3	42	54	44	200	340	白磁碗 1、青白磁瓶子 1、古瀬戸天目 1 (1)、皿 1 (2)、瓶類 1 (3)、在地播鉢 6 (4)、珠洲甕 1
Pit 2				/	1	
3						須恵質陶器 1
5		1			1	
7				1	1	
8		1			1	
9				2	2	
11				3	3	
12		1			1	
13				2	2	
15						在地播鉢 1
19		1			1	
20		1			1	
22				1	1	
25				2	2	
27		1			1	
28			1	2	3	
29				4	4	
30				2	2	在地播鉢 1
32				2	2	
34				4	4	
36	1			2	3	
38				3	3	
39				1	1	
40				1	1	
41				1	1	
43				2	2	
45				1	1	
48		1			1	
49				2	2	
52				1	1	
55				2	2	
57				2	2	
59				1	1	
62		1	2		3	
65	1				1	
68			4		4	

表 遺構別出土陶磁器 一覧 (数字は破片数、() 内は図番号)

3 栗田城の地籍図による復原

(財)長野県埋蔵文化財センター調査研究員 河西克造

栗田城付近は宅地化が進んでおり、地表面観察で城郭施設を確認することは困難であるが、現在、日吉神社境内になっている主郭(註1)北西隅で唯一土塁と堀の形跡が確認できる。「L」字状に残存する土塁の頂部には神社の祠が祀られ、土塁頂部と外側斜面の一部に旧状が見られるほかは、コンクリート製の石垣により面影を残さない。この土塁の外周には細長い範囲で遊園地があり、この範囲から堀のプランを想定することができる。

大正15年測図・昭和27年修正の「長野市3,000分の1地形図」によると、日吉神社の南方約110m付近に主郭土塁が確認される(図15)。ここには土塁の屈曲部(隅)が2ヶ所表現されており、これにより栗田城の主郭が120m四方の方形をなしていたことがわかるが、この土塁を現状で確認することはできない。

このように宅地化により旧状を著しくとどめないため、現在まで栗田城の全体像が不明確であった。したがって、本稿では地誌類などで本城館(註2)について記載している内容を検討し、明治31年作図の地籍図を資料として栗田城を復原したい。なお、ここでの記述内容が前項(Ⅱ、栗田城跡の環境)と重複する部分があり、若干の表現の相違があることを了承願いたい。

・栗田城についての従来の認識

『長野県町村誌』(以下『町村誌』と略す)に「村の中央東番場耕地にあり、東西6丁30間餘、南北10丁回字形を爲す、本丸跡方百20間西北に曲りて高さ5間東西17間3尺の築堤あり、此處に村社栗田大元神社を奉齋す。此地の西よる北へ繞りて、幅6間餘長さ37間餘の堀あり、南方外曲輪の地は若里村の内市村組に属す外堀跡を今字蓮堀と稱す栗田氏代々の居城地たり。」という記載とともに、「堀ノ内城址」とした図面が掲載されている(長野県・1936)。栗田城周辺は比較的早く宅地化され、面影をほとんど残さなくなったため、この記載内容を検証することなく現在に至っている。したがって、後に米山一政氏は、『上水内郡誌』の栗田城の項目でこの文章を引用しているが、これ以上の言及はしていない(上水内郡誌編集会・1976)。また『長野県史』では、本城館が複郭式で外郭土塁の一部が円通院境内に残存していると指摘している(長野県史刊行会・1987)。さらに、『角川日本地名大辞典』と和田博氏は栗田城の構造について、二重の水濠を巡らした複郭式の平城で、規模は外郭が東西709m、南北1,090mで、内郭は約220mの方形であることを示している。城の規模については『町村誌』の間尺方を現在のメートルに換算して想定しているが、基本的な城郭の捉え方は『町村誌』と同様である(角川日本地名大辞典編集委員会・1990、長野市教委・1991)。

以上、概略的ではあるが、栗田城に関す

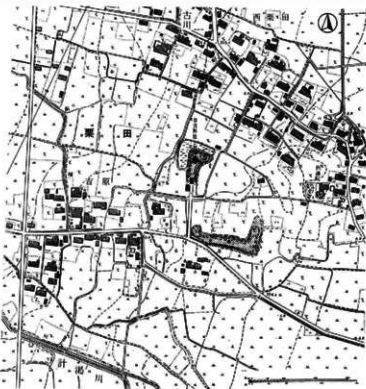


図15 栗田城跡周辺の地形図(1:6,000)
(大正15年測量・昭和27年修正図に加筆) アミ:主郭土塁

る従来の見解を列記した。次にこの認識の再検討を行なうこととする

・栗田城の範囲について

まず『町村誌』の内容と図面の検討を試みるが、東西約700m・南北約1,000mの広大な面積を栗田城の城域として把握できるか、という問題がある。

図面に表現されている栗田城は、中央部に方形の「本丸跡」があり、土塁は北東隅付近がないものの基本的に全周している状況がうかがえる(註3)。堀は本丸の北西隅に当たる現在の遊園地付近に残存しており、ここ以外は凹地が土塁に沿って方形に巡る状態である。さらに本丸の外側には南北に長い形状をなす広大な平坦地があり、堀が巡る構造を示し、東側中央部に大手口がある。なお外郭(註4)には「耕地」、堀の南端部分に「此地ヲ今蓮池ト伝ウ」と注記がある。この図面と大正15年測図の地形図とを照合すると、土塁と堀の残存状況と主郭の構造はほぼ一致する。しかし外郭の堀は確認されず、ほぼ該当する位置に古川と計湯川があり、古川以北は舞台・計湯川以南は蓮池地籍になる。また両河川の間位置する主郭周辺には、派生する水路と古川・計湯川と平行する前環などの多くの水路を見ることができる。

以上のことから『町村誌』の図面は、主郭周囲は地表面観察で確認できる土塁・堀・凹地を、北と南側の外郭の堀は古川・計湯川と堰を表現していると推測できる。このことから、栗田城は複郭式の構造を呈し、東西約700m・南北約1,000mの範囲が城域であることが従来の認識であったが、後者については再検討する必要があることがわかる。

・地籍図による復原(図16)

地籍図を資料として復原を行なうが、筆者自身地籍図の判読について十分な知識を持ち合わせていないため、本稿での復原について多くの方に批判をいただくことを期待し、今後に活かすための試みとしたい。

城郭において地表面観察で確認できる縄張りや、城郭の最終段階を示しているに過ぎず、縄張り研究には限界性がある。これは地籍図を用いて判読する方法にも共通するが、地籍図は現状では確認されない堀・土塁のみならず、館のプランと館周囲の区画(地割)を読み取ることができる貴重な資料である。最近、西日本を中心に発掘調査の資料と絵図・地籍図などの照合により縄豊期の城下町研究の進展がめざましい動向である(清川・1998、千田1989など)。このように地籍図を用いて館の内部と周囲、さらには城下町(註5)などを復原する方法は有効な方法論ではあるが、地籍図は明治年間以前の様相を示していなく、復原には限界性があることを前記しておく。

地籍図(註6)では、ほぼ中央部に南北160m・東西140mの規模の方形のプランを読み取ることができる。このプランの北西隅には「栗田神社」の文字が見え、この部分が若干突出する形状は、大正15年の地形図と一致するため、栗田城の主郭に当たることがわかる。主郭の地目では、北東隅が「池沼」であるものの、基本的に「田」になっており、この範囲が主郭の堀であったと推定される。さらに堀の内部には土塁に比定できる地割があり、地目は「畑」となっている。この地割は「栗田神社」境内を除き(註7)、堀と並走するため、栗田城の主郭には土塁が全周していたことがうかがえる。主郭では地割と地目の相違により、堀と土塁が明確に判読できるが、北西隅の土塁は栗田神社境内になるため、地割は確認されず、また北側では堀と土塁の境界が不明瞭な箇所があるが、両者とも連続していたと考えてよいであろう。また、堀が連続しない東側中央部は土橋を推定でき、主郭の出入口は東側にあったといえる。

主郭外側の地目では、全般的に西側と南側が「田」、東側と北側が「畑」・「宅地」である。したがって主郭と同様に地割と地目とにより外郭を読み取ることが困難であるため、ここでは地割を中心として外郭を復原することにした。

まず、主郭外側の南北約290m・東西約280mの範囲に、北西隅が突出する主郭と同様な方形プランを確認でき、

これが外郭に当たると推定される。また、北西と南側ではプランに沿って水路が流れており、外郭の堀として捉えることができるが、主郭のように堀に並走する地割が確認されず、土塁の存在はわからない。堀が連続しない東側一角は主郭同様、土橋を想定でき、主郭のものより若干北方に位置する。2ヶ所の土橋から、本城館の主たる出入口が東側に設けられていたことがわかり、この点は『町村誌』の記載と一致する。

外郭の堀は主郭同様、基本的に全周する。和田博氏と『長野県史』では、円通院境内に残存する高まりを栗田城の外郭土塁の一部と解釈しているが、地籍図で確認された堀のプランからすると、堀の外側に土塁が構築されていたこととなり、城館の構造上、この高まりを積極的に城郭施設として捉えることは困難である。

外郭と主郭の堀に挟まれた空間の大半は「畑」であるが、西側と南東側の2ヶ所に「田」が見られる。この部分を堀と解釈した場合、外郭と主郭の堀がつながっており、外郭は大きく2分割される構造になる。

地籍図では栗田城の主郭と外郭が確認され、二重の堀で構成された複郭式の城館であることが判読できる。しかし、地割では外郭より外側に城郭施設が存在した様子は見られないため、栗田城の城域は約300m四方の範囲に構成された外郭までと捉えることができる。

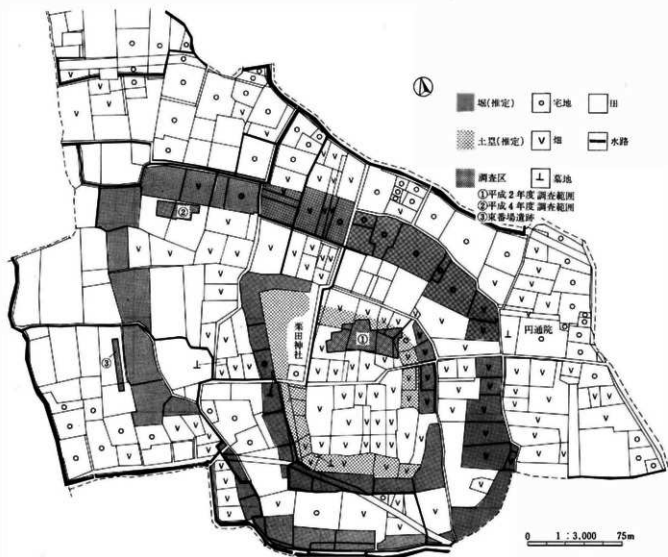


図16 栗田城跡周辺の地籍図（栗田神社部分は残存する土塁の範囲を投影）

次に複郭式を呈する城郭の時期についてである。地籍図からは城館の時期はわからないが、今回復原したプランと発掘調査との関係を若干触れてみる。

栗田城は戦国期に武田氏と関係をもちつつ慶長年間に廃城になったようであるが、平成2年度調査・4年度調査とも出土遺物の中心は14世紀代～15世紀前半代のものであり、大塔合戦の頃かそれ以前の時期を示している。したがって、栗田城は14世紀代にすでに約120m（約1町）四方の主郭が存在し、複郭式の構造をもつ城館で、戦国期には改修がなされていないと解釈できる。

善光寺平には平地の居館・屋敷が多く分布するが、主郭の規模は約半町四方のものかほとんどであり、約1町四方を有する城郭は栗田城のほか例がない。この点で栗田城は卓越しており、栗田城は文献史料、地名・地籍図などの従来の方法のほか最近の発掘調査による考古学的資料を加えて検討することが可能な遺跡であり、現在は周辺の城郭との関連性などから歴史的位置を考え直す時期であると言えよう。

・発掘調査の成果と関連性

栗田城跡の平成2年度の調査地点は主郭の北側部分に当たる。遺構分布図を見ると遺構は調査区のはほぼ全体に密集するが、北側の一角では遺構が検出されていない（長野市教委・1991）。この部分には土塁が存在していたものと解釈でき、空白部分の南端と地籍図で土塁と比定した地割がほぼ一致していることがわかる（図17）。さらに平成4年度の調査地点は外郭の北西隅付近に当たる。調査では溝（堀）と掘立柱建物址が検出されており、3条の溝は外郭の堀に当たると推定され、調査ではこの溝を埋めて掘立柱建物址と墓址が構築されている。しかし昭和62年度に東番場遺跡として本城館の西側を調査しているが、中世の陶磁器が一点出土したにすぎないことから（長野市教委・1988）、基本的に本城館の遺構は外郭内に集約されていると考えられる。また、溝の上部に掘立柱建物址と墓址を構築する行為を外郭の拡大とも解釈できるが、それは外郭のプランを大幅に変更する規模には至っていないと推定される。

最後に、今回は東番場地籍の地籍図に限ったため、栗田城の周囲の状況について触れることができなかった。「地籍図」は明治地租改正以降に全国的に作成された土地古帳・土地登記簿の付図であるが、縮尺が1/600と大きく、閲覧と記録の困難さを実感した反面、城館が判読できる字図のみならず、周囲の状況も含めて城館の構造を把握する必要性と、地籍図の効率的な活用方法が今後の課題であることを痛感した。

筆者は平成元年度に奈良国立文化財研究所の特別研修「城館遺跡調査過程」で地籍図による城館跡の判読方法と資料の活用方法を学ぶ機会があり、後に中井均氏・千田嘉博氏などから多くの教示を受けた。最近、茅野市上

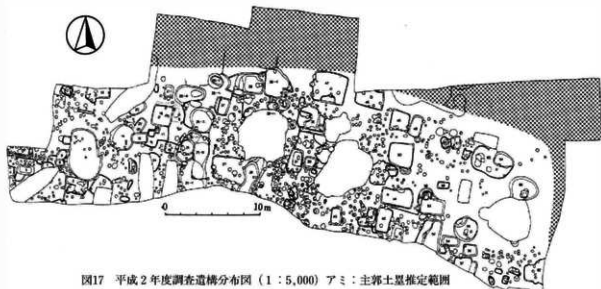


図17 平成2年度調査遺構分布図（1：5,000）アミ：主郭土塁推定範囲

原城下町遺跡・長野市塩崎城見山砦遺跡などで実践的な判読を試みたに過ぎず、城館研究における「地籍図」の活用方法を模索している段階である。したがって、今回の復原では多くの疑問が生じ、そのすべてを解決するに至っていない状況である。今回の経験を今後の復原作業に活かすとともに、地籍図の活用が「城館調査・研究」の“基礎的操作”になることを期待するとともに、今回閲覧に際して、長野市地方務局の方々に便宜をはかっていただいたことに感謝を申し上げることで、拙い文章を終りにしたい。

註

- 1) 栗田城の中心部分を「主郭」とした。
- 2) 城・館を総称して「城館」という用語を用いた。
- 3) 栗田城の図は「長野縣町村誌」のほかに「日本城郭史資料」にも見られる。
この「日本城郭史資料」は昭和8年に陸軍省の築城部に設置された本邦築城史編纂委員会が全国の城郭を編集したものである。全42冊で構成されたこの資料は、現在国立国会図書館に所蔵されており、第13巻と第14巻が信濃国に当てられている。栗田城は「堀ノ内城」として14巻・信濃国(二)に納められているが、「長野縣町村誌」掲載の図を模写した図面である点が残念である。しかし、ほかの城郭では詳細な実測図と解説があり、敗戦前の城郭研究を捉える上で貴重な資料である。
- 4) 主郭外側の曲輪を外郭とした。
- 5) ここでは、城の周囲に展開する町屋を「城下町」と呼称し、特に概念規定はしていない。
- 6) 栗田城の復原では「上水内郡芹田村大字参番字東番場全図」(明治31年作図・長野市地方務局所蔵)を用いたが、地目に加筆・修正が認められるなど、本図が明治31年以降にも使用された形跡がある。
- 7) 栗田神社境内には主郭土塁が表記されていないため、地籍図をトレースする際に大正15年測量の地形図で確認される土塁を投影した。

・参考文献

- 長野縣 1936 「堀ノ内城城」(『長野縣町村誌』北信篇)
上水内郡誌編集会1976「栗田城」(『上水内郡誌』歴史篇)
桑原公徳 1976 『地籍図』
小和田哲男 1981 「地名・地籍図による城館跡の復原」(『静岡県の中世城館跡』)
長野県史刊行会 1987 「長野県史」通史編第3巻・中世2
前川要 1988 「近世城下町発生に関する考古学的研究」(『ヒストリア』121)
長野市教育委員会 1988 『東番場遺跡』
千田嘉博 1989 「小牧城下町の復元的考察」(『ヒストリア』123)
角川日本地名大辞典編集委員会 1990 「栗田城」(『角川日本地名大辞典』)
小島道裕 1990 「文献及び地籍図による城館跡の調査」(奈良国立文化財研究所特別研修『城館遺跡調査過程』資料)
長野市教育委員会 1991 『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)』
小島道裕 1992 「平地城館と村落」(『第8回全国城郭研究者セミナー・シンポジウム「小規模城館」研究報告編』)
中井均 1993 「本邦築城史編纂委員会と『日本城郭史資料』について」(『中世城郭研究』第7号)

長野市の埋蔵文化財

1968年度	第1集「信濃長原古墳群」	第28集「宮崎遺跡」	
1976年度	第2集「浅川西条」	第29集「浅川端遺跡」	
1978年度	第3集「中村遺跡」	第30集「地附山古墳群」	
	第4集「塩崎遺跡群」	第31集「町川田遺跡」	
1979年度	第5集「塩崎遺跡群(2)」	1989年度	第32集「中条遺跡」
1980年度	第6集「三輪遺跡—付水内坐一元神社遺跡」	第33集「鶴前遺跡・塩崎城跡」	
	第7集「田中沖遺跡」	第34集「石川条里遺跡(4)」	
	第8集「籙ノ井遺跡群」	第35集「籙ノ井遺跡群II」	
	第9集「四ツ屋遺跡(第1～3次)・徳間遺跡・塩崎遺跡群(3)」	1990年度	第36集「屋地遺跡II」
1981年度	第10集「湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡」	1991年度	第37集「籙ノ井遺跡群III」
	第11集「箱清水遺跡・大塚遺跡・大清水遺跡」	第38集「栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)」	
1982年度	第12集「浅川扇状地遺跡群—牟礼バイパスA・E地点遺跡—」	第39集「塩崎遺跡群(6)・石川条里遺跡(5)」	
1983年度	第13集「浅川扇状地遺跡群迎田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構」	第40集「松原遺跡」	
1984年度	第14集「石川条里的遺構(2)・上駒沢遺跡」	第41集「小島柳原遺跡群中俣遺跡・浅川扇状地遺跡群押鐘遺跡・壇田遺跡」	
1985年度	第15集「箱清水遺跡(2)」	1992年度	第42集「田中沖遺跡(2)」
1985年度	第16集「石川条里的遺構(3)・(付上駒沢遺跡)」	第43集「南宮遺跡」	
1986年度	第17集「浅川扇状地遺跡群—牟礼バイパスB・C・D地点—」	第44集「塩崎遺跡群(7)」	
	第18集「塩崎遺跡群IV—市道松節小田井神社地点—」	第45集「石川条里遺跡(6)」	
1987年度	第19集「土口將軍塚古墳—重要遺跡確認緊急調査—」	第46集「籙ノ井遺跡群(4)」	
	第20集「三輪遺跡(2)」	第47集「浅川扇状地遺跡群二ツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡」	
	第21集「芹田小学校遺跡」	第48集「小島柳原遺跡群中俣遺跡II」	
	第22集「長野吉田高校グランド遺跡」	1993年度	第49集「三輪遺跡(4)」
1988年度	第23集「横田遺跡群 富士宮遺跡」	第50集「浅川扇状地遺跡群木村東沖遺跡」	
	第24集「塩崎遺跡群V 殿屋敷遺跡」	第51集「松原遺跡II」	
	第25集「南川向遺跡」	第52集「田牧居塚遺跡」	
	第26集「東番場遺跡」	第53集「岩崎遺跡」	
	第27集「小栗見城跡」	第54集「古町遺跡 流入塚」	
		第55集「駒沢新町遺跡II」	
		第56集「上見林遺跡」	
		第57集「石川条里遺跡(7)」	
		第58集「松原遺跡III」	
		第59集「史跡 松代藩主真田家墓所」	
		1994年度	第60集「猪平遺跡・宮ノ下遺跡」

長野市の埋蔵文化財第61集

栗田城跡(2)
(東番場遺跡)

平成6年3月25日 印刷

平成6年3月31日 発行

編集 長野市教育委員会
発行 埋蔵文化財センター
印刷 日本平版印刷